

## 6 やつさ踊り<sup>おど</sup>

### 一 名称

やつさ踊り

### 二 文化財指定等の状況

未指定

### 三 伝承地

三原市（平成十七年の三町合併以前の旧三原市域）

### 四 上演の機会及び場所

かつては、商工会議所、観光協会、商栄会が個々に開催していた祭りが、昭和五十一年に一本化され、現在のやつさ祭りが始まった。毎年八月第二日曜日を含む金・土・日曜日に開催されるやつさ祭りが主な上演機会となっている。

やつさ踊りは三原市の伝統芸能として扱われ、例えば平成三十年三月二十日に三原市芸術文化センターポポロで開催された、三原城築城四百五十年記念のNHK「民謡魂ふるさとの唄」で上演、全国放映された。さらには、令和五年五月「G7広島サミット アウトリーチ国先遣隊歓迎レセプション」にて上演した。

このように、県内の各地行事で上演を行い、広く活動をしている。

### 五 行事次第、芸能の構成、演目、芸態その他

#### イ 行事次第、芸能の構成及び演目

年間行事としてのやつさ祭りは、主催者である三原やつさ祭り振興協議会及び三原やつさ祭り実行委員会が期間の全体プログラムを年

毎に企画する。三原駅前のバスロータリーに仮設のメインステージが設けられるのが恒例となっている。行事の中心はやつさ踊りであるが、このステージを利用した関連イベントや最終日の夜には沼田川河口付近で花火大会も行われる。

やつさ踊りは夕刻から夜にかけて、参加チームが必ずこのメインステージ前を通るような踊りのコースが設定される。参加チームは三原駅の東側または西側のどちらから出発し、メインステージ前を通過し、踊りながら行進する。また、子供たちのチームは、「子供やつさ」として、早い時間帯に負担の少ないコース設定で行われる。

芸能の構成は、三味線、笛、鉦、太鼓による演奏とお囃子を含む唄、そして踊りからなる。

#### ロ 設備・道具

踊り手が持つ小道具としては、赤・白・青のやつさカラーの手提灯。先頭に行く踊り手が持つ大うちわ。これは昭和四十五年の大阪万博に参加した際に、三原をアピールするために使い始められた。また、多くはないが、踊り手の中には竹を割って作られた「四つ竹」を両手に持ち、唄に合わせてカチカチと打ち鳴らす人もいる。

近年では、各チームが提灯やモールで思い思いに飾り付けた軽トラックなどを用意し、最後尾に同行する。花車とも呼ばれる。

#### ハ 役名・扮装・楽器等

演奏と唄とお囃子を担当する地方<sup>じかた</sup>と踊り手に分かれる。

基本的な扮装は男女とも浴衣で、踊りやすいように裾が短めになるように帯を締める。男性は前の裾を三角形に少し開くように帯を締め、男性は肩脱ぎをしないが、女性は右肩脱ぎをし、赤やピンク色の襦袢を露出する。男性は鉢巻きをし、女性はかぶり手ぬぐいを肩の上から両耳を隠すようにしてあごの下で結ぶ。浴衣の代わりに、揃いの法被姿のチームもある。



メインステージ上の地方の皆さん。右端が平太鼓。



踊り手だけのグループの一例。後尾に花車が同行している。

近年では、伝統的な衣装や踊りの所作にとどまらない、創作踊りのチームも増えている。  
履物は白足袋にぞうりが一般的であるが、地下足袋姿もある。  
帯にぶら下げる小物には、水や酒を入れる瓢箪、印籠などがある。  
地方が使う楽器は、三味線、篠笛、鉦と太鼓がある。太鼓には下腹前に水平にくくり付けて両手にバチを持って叩く縮太鼓と、肩紐で垂



縮め太鼓



鉦



伝統的な女性の衣装

直に支え、両手のバチで叩く平太鼓がある。この平太鼓も昭和四十五年の大阪万博から使われ始めた。  
近年では、地方と踊りのメンバーを揃えられるチームが少なくなり、踊りの二日間はメインステージにて三原やっさ踊り振興協議会の地方による生演奏が行われる。

## ニ 歌詞・詞章等

平成十七年にやっさ踊り実行委員会が企画・製作したやっさ踊り唄のCDに録音された歌詞・お囃子（合いの手）を記載する。

見たかエー  
ハッ ヤッサヤッサ  
ヤッサヤッサヤッサモツサソツチャセー

見たか聞いたか  
三原の城はエー

ハーアラ ヨイヨイヨイヤナー

ヨイヤナー

地から湧いたか  
サーマヨ ハッ ヤッサヤッサ

浮城かヨー  
ヤッサヤッサヤッサモツサソツチャセー  
（以下 囃子言葉、合いの手は省略）

三原エー	三原よいとこ	町まん中にエー
昔忍ばす	城の跡ヨー	
夢のエー	夢の浮城	かすみに明けりやエー
昇る朝日の	桜山ヨー	
春はエー	春は三月	能地の沖にエー
今も浮きます	桜鯛ヨー	
何をエー	何を描くやら	筆影山はエー
風の波間に	影写すヨー	
三原エー	三原みなどは	情けの町よエー
酒の出どころ	恋どころヨー	
酒をエー	酒を飲むなら	三原の酒をエー
心うきうき	踊り出すヨー	
見たかエー	見たか三原の	胡蝶の踊りエー
風に桜の	花が散るヨー	
月はエー	月はまんまる	金波に銀波エー
やっさ踊りに	夜がふけるヨー	
踊りエー	踊り疲れて	寝てみたもののエー
遠音ばやし	気にかかるヨー	

この歌詞以外にも、例えば『三原市史 第七巻』に収録されているものを転記する。

西へ西へとお月も星も さぞや東はさびしかろ  
西へ行こうか東へ行こか ここが思案の開明橋

また、別の資料には、

港へ 港糸崎旅行く鳥も 花の乙女に飛んでくる

というように、他にも別の歌詞があり、時代や町内によって違いがあったものが、祭りが観光行事化されるとともに、統一されてきたように思える。

#### ホ 芸態（踊りの形態）

備後地方の盆踊の多くが、広場で輪になって回る型であるが、やっさ踊りと福山の二上り踊りだけが行進型となって継承されている。元が念仏踊だとすると、二拍子のゆっくりした静かな踊りであったものが、テンポの速い賑やかな踊りに変化してきたようである。

#### へ 連れ弾き

元々やっさ祭りとは直接関連のないお盆の行事だったようだが、今ではやっさ祭り初日の早朝六時から七時頃に、西町から町内の小路を三味線、笛で演奏しながら流して三原駅の北の城跡公園まで歩く。かつては初盆を迎える家を巡って流したようだが、今ではそのような門付けは行われていない。

演奏される曲は「三原小唄」「やっさ踊り唄」で、演奏のみで唄は歌わない。

装束はやっさ踊りと同様だが、編み笠を被るのが特徴である。この連れ弾きの由来は、『三原市史 第七巻』によると、昭和二十五年頃までは旧暦の、その後は新暦の八月に、早朝娘たちが編み笠を被って三味線を弾いて町を流し、その後ろを師匠たちが踊って歩いた。午後は芸者が豆しぼりの頬被りをして尻からげで踊って歩き、夕方からは町民が踊って歩いたとされている。その名残りかもしれない。

#### 六 組織ほか

やっさ祭り全体は、官民で組織される三原やっさ祭り振興協議会とそ



踊りの基本的な所作

(三原やっさ祭り実行委員会提供)



令和4年8月13日早朝

西町を流す連れ弾きの一行

供たちも含めて、広く一般市民に教え、希望する受講者には、級審査を行い認定証を出している。

やっさ祭りに参加申込みしたチームは、学校の体育館、町内の集会所などを借りて練習し、本番に臨む。

## 七 由来等

諸説あり起源は定かではない。

古い念仏踊の芸能をそのまま伝えていくことから、大善寺（現在は西町、三原城築城以前は本郷町）の境内で行われていた鎌倉・室町時代に流行った念仏踊の流れをくむ「ほとけ踊り」をルーツとし、永禄十年（一五六七）、小早川隆景による三原城築城を祝って、地元民が踊って祝意を表したという説などがある。

## イ 唄

九州平戸、天草、鹿児島などの港町がルーツとされる「ハイヤ節」の流れをくみ、酒席での囃し唄が北前船によって各地に伝搬し、手踊りが加わったという説がある。

また「ハイヤ節」のテンポを早くして、歌い手と踊り手の間で、囃子言葉を掛け合い、盛り上げてゆくように変化してきているとも言われている。

## ロ 踊りの所作

ナンバ踊りの流れを汲み、右手足、左手足と交互に前に出してゆくが、足は上下に曲げ伸ばし、手はまねき手とする。体全体を上下左右に動かすところから、「胡蝶の踊り」とも言われている。

## ハ 付近の類似のもの

特になし。

の下部組織であるやっさ祭り実行委員会が企画・運営に当たる。その祭りの中心となるやっさ踊りは、各町内会、企業、子供会、学校、PTAなどが作るチームごとに参加申込みを行う。

各チーム編成については、特に制限はなく誰でも参加できる。また参加費用も各チームの負担である。

やっさ祭りにおけるやっさ踊りは、三原市の八月の大きな観光行事として定着し、踊りの所作や衣装に制約がなく（特に異様なものは禁止）、創作ダンス的な踊りも登場してきている。一方で、伝統的な踊りを伝承するための任意の組織もある。

最も歴史が古いのは昭和八年結成の「三原ヤツサ会」、次いで昭和二十年代発足の「三原やっさ踊り保存会」がある。

その後、昭和四十五年大阪万博に広島県代表としての出演を機に、現在基本としている所作や衣装ができあがった。

毎年七月になると、市観光課担当の「やっさ教室」が開催され、三原やっさ踊り振興協議会の指導員が講師になって、踊りと地方の基本を子

なお、三原市は小早川家のルーツである相模国早川荘、現在の神奈川県湯河原町と昭和五十一年八月七日に親善都市提携を結んだ縁で交流が始まり、湯河原やっさ祭りが毎年八月二日、三日に行われやっさ踊りが町中を練り歩いている。また湯河原町からも三原やっさ祭りに参加されている。

湯河原やっさ踊りが派生して、東京都豊島区最大の祭り「ふくろ祭り」のなかで、「池袋やっさ踊り」が登場している。

また毎年七月下旬から八月下旬に行われる竹原市の住吉祭りの中で「竹原やっさ踊り」が踊られている。

## 九 記録類

### イ 録音記録

・CD 「やっさ踊り唄」第三十二回やっさ祭り実行委員会企画・製作  
平成十九年

・CD 「三原やっさ節」三原やっさ踊り振興協議会企画・製作  
令和五年

### ロ 参考文献

・『三原志稿』青木充延編著 澤井常四郎増補 備後郷土史会 昭和十年

・『三原市史 第七巻 民俗編』三原市役所 昭和五十四年

・『広島県の盆踊』真下三郎 溪水社 昭和六十二年

・『みはら雑学王』ギミック都市生活研究所 三原市ふるさと情報発信事業推進協議会 平成二十二年

(西村 雅幸)

## 7 小坂チンコンカン踊り おさか おど

### 一 名称

小坂チンコンカン踊り（地元での呼称 チンコンカン）

### 二 文化財指定等の情報

三原市無形民俗文化財（平成十一年十一月十八日指定）

### 三 伝承地

三原市小坂町

### 四 上演の機会及び場所

毎年 八月十四日から十六日の三日間実施される。

十四日、十五日は小坂町民会館を中心に、終日小坂町内の各集落を巡

り、一軒毎に玄関前や庭先で踊る。現在、小坂町の世帯数は約七〇〇あり、十四日は町内南半分、十五日は北半分を廻る。かつては牛舎を持つ家があれば、その家の牛舎の前でも踊っていた。戸数約二〇〇戸の小坂団地ができてからは、団地内の主要道路を巡り、団地内数ヶ所でも踊るようになった。

十六日には小坂町を出て、午前中は三原市役所前、三原駅前、県立広島大学のキャンパス及び新倉町内の各戸を巡り、午後は新倉一丁目の大須賀神社（通称 牛神社）で市内各地区から集まった他団体とともに奉納踊りを行い、三日間の上演を締めくくる。なお、令和七年から、大須賀神社での奉納踊りは、猛暑のため午前九時の開始に変更された。

### 五 行事事次第、芸能の構成、演目、芸能その他

#### イ 行事事次第、芸能の構成及び演目

(1) 行事事次第 令和六年度の実例を記す。



小坂町民会館に掲げられた看板



15日午前7時 小坂町民会館前の出発風景



各戸の庭先での演奏、踊りの様子

十四日七時に小坂町民会館を出発、町内の南半分にあたる川西、松原、鳥越、小坂団地、長谷川、川東地区の各戸を昼食をはさんで巡回し、十七時頃に町民会館に戻る。十五日も七時に町民会館を出発し、町内北半分の中組、引迫、大長寺、皆井田、中組、川西地区を巡り十六時頃帰着。十六日は八時三十分三原市役所前、八時四十分三原駅前九時十分県立広島大学三原キャンパスで演じた。その後、大須賀神社を起点に新倉町内各戸を巡り、新倉一丁目の山頂にある瘡神社（通称かさのみさん）まで登って奉納した。大須賀神社に戻り、昼食を取った後は午後の合同奉納となった。

※令和七年から合同奉納は午前九時開始に変更。



合同奉納が行われる新倉一丁目の大須賀神社



まず拝殿を3周 右回りする。  
この時だけは御幣持ちが先導する。



鬼役3人による太鼓踊りの演技。  
この時だけは大大鼓が3人となる。

令和六年度の大須賀神社への合同奉納は、小坂チンコンカン踊りの他、宗郷町太鼓踊り、明神町八ツ頭チコカン踊りの三団体によって奉納された。

大須賀神社での合同奉納は神社の例大祭の次第として演じられるため、まず神職による神事で始まり、神職より戸数分の祈禱札が配布される（これは後日地元で配られ、翌年のトンドで焼かれる）。神事後、七月に行われた打合せ会で決められた団体順に、約二十分ずつ踊りが演じられた。団体毎に鳥居をくぐって境内に入り、拝殿の周囲を右回り（時計回り）に三周した後（これを「導き奉納」という）、拝殿前の広場で踊る。

### (2) 芸能の構成・演目

鉦役がリズムをとり、大太鼓役が踊るように大きな動作で太鼓を叩き、小太鼓役は合の手（掛け声）を入れる。そのリズムに合わせて、鬼、天狗が棒を振り回して踊る。歌詞などはない。演目は一種類のみである。

### ロ 設備・道具

楽器以外の道具は、行列の先頭に行く「小坂チンコンカン踊り」と書かれた幟と、鬼や天狗が持つ六尺棒、大太鼓や鉦を二人でかつぐ天秤棒ぐら

いである。但し、家が点在する町内巡行は歩行距離も長く体力的な負担も大きい。大太鼓は一輪車または軽トラックに乗せて地区間を移動している。なお、鬼が持つ小さな破魔弓は大須賀神社への奉納時に使われる。通常、道具類は小坂町民会館に保管されている。

### ハ 役名・衣装・楽器等

#### (1) 役名

幟持ちは一名。行列の先頭に行く。この役だけは大人が務める。

天狗・鬼は数名（以前は大鬼、小鬼の二名だったと思われる）、大太鼓は約一〇名が交代で、小太鼓は約一〇名、鉦は二名（二名が天秤棒にぶら下げて担ぎ、後ろの人が叩く）。すべて高校生から小学校までの男女で編成され、体力に応じて鬼・天狗は高校生が担当し、鉦、太鼓は年齢・男女の別なく誰でも演じられるよう練習している。なお鬼の二名程は、各地区巡行時には一行より先行し、各戸への先触れの役（「先鬼」と呼ばれる）も担ったり、家主の求めに応じて家の中へ上がることもある。

#### (2) 役衣装

天狗や鬼は上下とも赤い作務衣に面と赤や黒のシヤグマを着け、足元は地下足袋を履いて、軽快な動きができる装束である。

大太鼓、小太鼓、鉦役は半ズボンと半袖シャツの上に、大太鼓は青の法被に赤い袴、麦わら帽子の全周に色紙を切り込んだ飾りをつけて被る。小太鼓は赤の法被に色とりどりの飾りを付けた編み笠を被る。

#### (3) 楽器

大太鼓…長胴の鉦留め太鼓。撥は棍棒状で太く短い（約三五cm）小太鼓…「ベチ太鼓」「ベチ」と呼ばれ、団扇のように柄がついている。

撥は棒ではなく、ヘラ状の平たいもの。「ベチ」の語源は定かではないが、子牛、ベコからきているとも考えられる。

鉦…直径約三〇cm、厚さ約一〇cmの凹断面のもの（摺り鉦）。木槌状の撥（長さ約三〇cm）で叩く。



令和6年8月9日の練習風景より。  
 (上) 高校生が鉦でリズムを作り、大太鼓を練習し、(下) 高校生が小太鼓の細かな動作を指導している。

## ニ 歌詞・詞章等

小坂で演じられているものに歌詞や口上は無い。踊りの合間に入れる「ソレ」などの掛け声だけである。

## ホ 芸能

一連の動作の開始やリズムは鉦の演者の合図による。そのため経験豊富な高校生が担当する。

大太鼓は、移動時は天秤棒にぶら下げたり、一輪車に乗せた状態で叩きながら進むが、各戸や神社での演奏時には太鼓を地上に置き、一人が太鼓を傾けた状態で支える。大太鼓の演者は、利き手に撥を持ち、もう片手には唐辛子に見立てた赤い房を持って中腰になって叩き、一定間隔で後退して体を反転させるような動きを繰り返す。体力を要すことから、小学校高学年、中学生、高校生が担当する。

小太鼓は、小学校低学年の子が担当し、各戸や神社での演技のは横一列に並んで、同じ位置で一步程度前後に動き、一連の動作の終りには、その場で体を一回転させる。

鬼や天狗(般若)の面を付けた高校生は、二人が向かい合って立ち棒振(ぼうふり)という六尺棒を体の前後で振り回したり、お互いの棒を打ち

合ったりして踊り、一連の動作の最後には「ウオー」とか「ワー」と大声で叫んで終わる。

それぞれの役や楽器には意味があるとされ、特に鬼の持つ性格には両義的な性格がみられる。小坂町の沼北しやうほく小学校製作の資料には次のような話が採録されている。

鬼には神が宿るとされ、赤い衣装に面を付け、小さ破魔弓や扇子を持って踊ったとのこと。

また、鬼は邪鬼を払う存在として各戸の訪問時には歓迎され、子供を追いかけて鬼が家に入ると縁起が良いとされた。唐辛子を塗られたり、鬼にだっこされた子供は元気で我慢強い子になるとされている。本調査でも怖がって泣き叫ぶわが子を鬼にだっこしてもらおう情景がよく見られた。

鬼が各戸を廻る時、まず鬼は家の中の神棚にお参りし、牛舎の前で牛馬に手を合わせて健康と安全を祈ったという。

元は牛馬のための踊りだったのが、雨乞い踊りの様相を兼ねるようになり、鬼は雷神、雨神を、鉦の音は稲妻を、太鼓の音は雷鳴を、撥の音は雨音を、棒振りは雨脚を意味するとされている。このような意味付けは、一説には明治末期から大正初めに沼田下からこの踊りを伝習した時には、既にあったという。



鬼を怖がる幼児

## 六 組織ほか

### イ 行事全体の運営組織

昭和五十二年以来、小坂町内会の文化部が運営している。戦前は青年団が運営していたが、戦後十年間程は途絶えていた。昭和五十年代前半に高校生有志によって復活し、今日まで演技は小・中・高校生によって受け継

がれている。大学生や社会人は町内会文化部として伝承活動を陰で支えるが、敢えて口出しはせず、裏方に徹している。

#### ロ 芸能出演者の資格、職、伝習得法

小坂町内の小・中・高校生が演じる。あくまで任意参加だが参加率は高い。かつては男子に限られていたが、少子化によって男子だけは伝承できず、平成二十年代から女子も加わって演じるようになった。リーダー（頭（かしら）」と呼ぶ）は高校生が務める。頭は演技の指導のみならず、各戸訪問時に頂く「心付け」「御祝儀」の会計管理なども任されていて、取りまどめ力が必要な立場である。毎年の練習は、八月一日から十三日まで、毎日十八時から一時間町民会館で行われ、数人の高校生が細かな動作まで指導している。仕事を終えた社会人も時折顔を出し、高校生たちを見守っている。なお、町民会館二階の集会室は広さの関係で棒振りの練習に適していないため、全員練習が済んだあと、高校生たちは町民会館前でスマートフォンに録音した鉦、太鼓の音に合わせて練習していた。

#### ハ 費用

練習から合同奉納までの一連の行事に要する費用は、五〇万円〜六〇万円である。収入源は町内会費からの約二〇万円と行事期間中に頂く「御祝儀」や有力者からの寄付金である。支出は飲み物代や氷代、弁当代、市内を移動する際のマイクロバス代と、演者である小・中・高校生への報酬（お小遣い）となる。この報酬額は、練習時から世話をしてきた高校生が金額を査定するなど予算管理も高校生が行っている。行事の運営費用の他、傷んだ楽器などの修理も必要で、令和三年度には公益財団法人の助成金により太鼓を修理したり、町内にあるゴルフ場から大太鼓の寄贈を受けている。

#### 七 由来等

踊りが奉納される大須賀神社は、室町時代の天文年間に疫病で死んだ牛を祀るために建立されたとされ、八月十六日が例祭日となっている。

踊りの発祥地や伝承経路は諸説あつて定かではないが、江戸時代の記録によると、小坂（現小坂町）、荻路（現長谷町）、沼田下（現沼田町、新倉町）の三ヶ村が牛馬の安全祈願のため大須賀神社（通称 牛神社、うしがみさん）に幟一本と踊りを奉納したことが始まりとされ、雨乞いや虫よけの祈りも兼ねるように変化したと言われる。「三原志稿」によれば、元々雨の少ない当地方では夏場の水不足が恒例化していた。旧暦七、八月の歳時記には「雨乞い入相踊り」が各地域での行事として記載されており、チンコンカン踊りはこの一種とも位置付けられる。

発祥の地については、小坂が発祥の地で、それが長谷、沼田下に伝わったという説や、小坂は沼田下から習ったという説など様々であり、更に戦時中の中断やその復活の際には尾道の「ベツチャー」から面などを譲り受けたなど、伝承経緯は複雑である。しかし、地区によって細かな動作などは違うにせよ、複数の地区で伝承されてきたことによる相乗効果が伝統芸能の消滅を防いだと言えるのではなからうか。

「ちんこんかん」の語源は、鉦や太鼓の音から来ているという説や干ばつに非常に強い竹の根を意味する「竹根乾」という説がある。更には、鎌倉時代に関東から下ってきた土肥実平によって、関東一円で行われていた雨乞いの呪術（太鼓と撥を打って雨を待つ風習）を夏の水不足に悩む小坂・沼田下の農民に伝わったとも言われている。

#### 八 付近の類似のもの有無 など

三原市内各地区には類似の芸能が伝承されている。

○沼田ちんこんかん（県指定、指定名称は「ちんこんかん」）

付近では最も歴史があると言われている。沼田ちんこんかんは小坂町より約四十年早い昭和三十四年に広島県の無形民俗文化財に指定されているが、かつて村外の大須賀神社に奉納に行くには許可が必要で、沼田にはその申請書類が残っていて年代の裏付けが明らかだったが、小坂など他地区

にはそのような由来を裏付ける物的証拠が無かったため、同時に指定されず、四十年後に三原市の指定を受けたとも言われている。近年は地区の高齢化が進み地元の沼田小学校を中心に活動を引き継いだが、コロナ禍などにより近年は活動できずおらず、令和六年度の合同奉納にも参加が見送られた。

○八ツ頭チコカン踊り（市指定・田野浦地区、明神地区） 口上あり。

○宗郷町太鼓踊り（市指定・三味道（さんまいどう）踊り）

歌詞あり。円になり中心に太鼓を抱え持った三人の太鼓打ちが三つ巴に交差しながら踊る。

○木原町太鼓踊り（市指定・赤石地区、内島地区・福地地区） 歌詞あり。

○深町太鼓踊り（市指定） 踊りの由来などを述べる口上あり。

廃絶したものには、登町チコカン、中之町王子社チコカンがある。

また、福地地区に隣接する尾道市吉和町には「吉和太鼓踊り」が傳承されている他、尾道にも類似芸能がある。

令和六年、小坂町の一行が新倉町内の各戸を訪問したが、以前は沼田町の一行が新倉町内を巡っていた。その慣習を小坂町の一行が引き継いでいる。

小坂町の小・中・高校生は猛暑の八月の約半月間、練習を重ね、最後の三日間、広い小坂町の隅々みまでのみならず、新倉町内や市役所などでも演技を繰り返して、きつい日々が続いたと感ずる。とりわけ、小さな後輩たちを氣遣いながら力一杯演じる高校生たちの姿が大変印象に残った。

## 九 記録類

### イ 文書記録

残っており、基本的には口伝である。

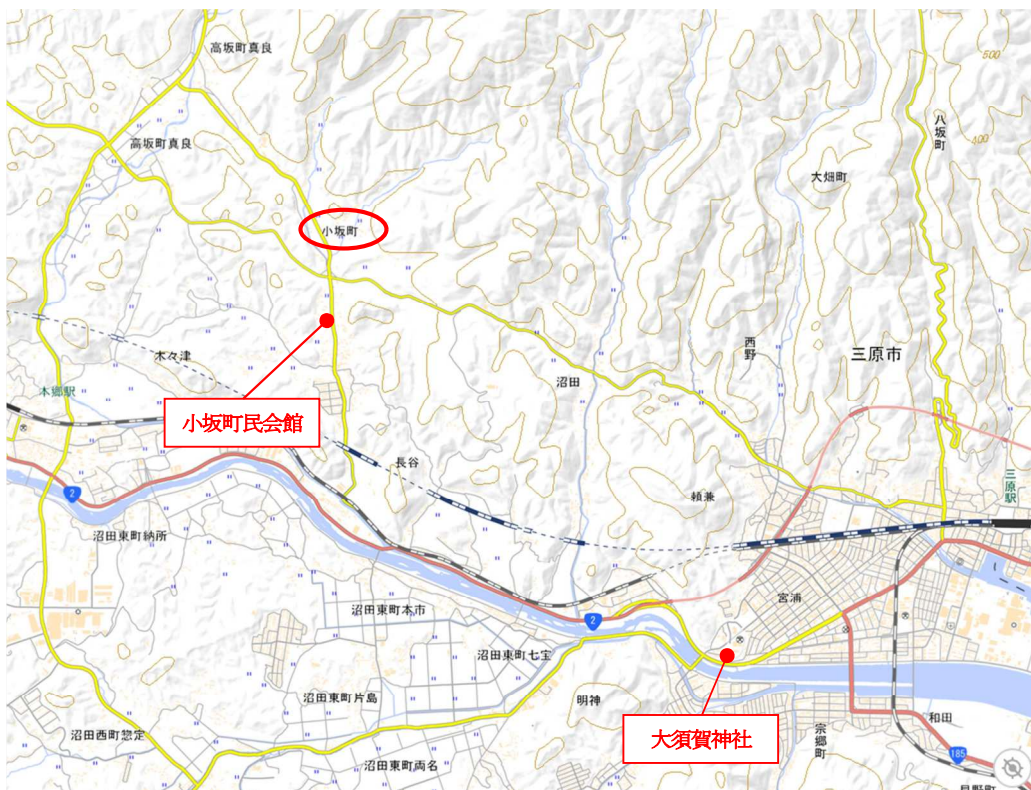
### ロ 映像記録・録音記録

・調査記録映像 広島県教育委員会 令和六年八月

### ハ 参考文献

- ・『三原市史 第七巻 民俗編』 三原市役所 昭和五十四年
- ・『三原市の文化財』 三原市教育委員会 平成二十八年
- ・『三原志稿増補版』 備後郷土史会 昭和十年

（西村 雅幸）



（地図出典：国土地理院 地理院タイル、一部加筆）

## 8 榎原八幡宮の獅子舞・鉦太鼓踊り

すきはらはちまんぐう ししまい かねたいこおど

### 一 名称

榎原八幡宮の獅子舞、鉦太鼓踊り

### 二 文化財指定等の状況

未指定

### 三 伝承地

尾道市原田町梶山田 かじやまだ (戸数約二二〇軒)

関連神社 榎原八幡宮 (尾道市原田町  
梶山田字有光九二八)

### 四 上演の機会及び場所

#### イ 上演の機会

・ 榎原八幡宮の秋の大祭の前夜祭 (令和六年は十月十九日 (土) に実施)。神社の総代会の要請を受けて行う (行われない年もある)。

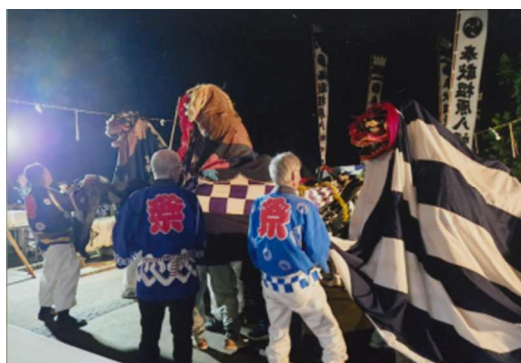
#### ロ 行われる場所

・ 榎原八幡宮の秋の大祭前夜祭では榎原八幡宮の境内。

・ 盆行事の時は、梶山田各地区内の民家の庭先又は広場。昔は民家の庭先がほとんどであった。なお、演じられる民家は、各地区、その年の当番宅一軒であるため、数十年に一度しか回ってこない。

#### ハ 中断時期

令和二年以降、新型コロナウイルス感染症の影響で諸行事が自粛されていたが、令和六年に榎原八幡宮の秋の大祭が五年ぶりに開催され、獅子舞・鉦太鼓踊りともに奉納された。



【写真1】 榎原八幡宮の獅子舞

## 五 行事次第、芸能の構成、演目、芸能その他

### イ 行事全体の次第、芸能の構成及び演目

令和六年の榎原八幡宮の秋の大祭行事次第は次のとおりで、梶下組が当番組であった。以前は各当番組が単独で芸能の奉納を行っていたことが多かったが、令和六年は梶下組が他の組に参加を呼びかけ、合同で奉納した。なお、後述するが、榎原八幡宮の祭礼では、「御当(おうちょう) (尾道市民俗文化財・榎原八幡宮宮座)」が現在も継承されている。

○ 十月六日 (日) 御注連おろし神事 (本当、二当、三当が出席)

○ 十月十九日 (土)

午後四時 前夜祭神事

午後四時半 神輿御霊入れ神事 (神輿四体。本当、二当、三当に各一

体、子供神輿一体)、御霊入れ終了後、神輿を各御当宅へ移

動

午後七時 芸能奉納 (例年は約二時間)

当日は、獅子舞、鉦太鼓踊 (一回目)、手踊り、鉦太鼓踊 (二回目) を行う予定であったが、直前の大雨のため上記に短縮して行われた。また、例年は階段下の神楽殿脇の広場で演じるが、足元が悪かったため、階段上の拝殿前広場に場所を変更して行われた。

芸能の次第は、次のとおり。

(1) 獅子舞 (午後七時～七時二十分)

道行↓獅子舞↓打締めと演じ、クライマックスは継獅子つぎししと呼ばれる豪快な舞が見ものである。詳細は、次のとおり。

#### 道行

梶下組、梶上組、上小味こみ・下小味組の順に、三体の獅子が太鼓の囃子に従って道行きを行い、獅子舞を演じる境内に向かう。この時点で、胴幕の中には一〇人前後が入り、一体の長さは五m前後の長大な獅子となる。

庭入り(境内入り)・土俵廻り・宮廻り

踊り場となる境内へ入り(庭入

り)、境内を時計回りに三周する(土俵廻りという。令和六年は拜殿前で演じたため省略)。続いて、宮廻りを時計回りに三周、太鼓のリズムに合わせて、獅子頭を左右に小刻みに動かしながら回る。

**御宮参り(宮まいり)**

獅子頭を持つ「カシラ」を先頭に神前に向かって整列し、三体それぞれ、獅子頭を神前の台の上に載せる。神前に向かって整列した隊形で、太鼓のリズムに合わせて獅子舞を演じる。「宮まいり」(獅子が立ち、神前に進む)と「御宮下り」(獅子がしゃがみ、そのまま下がる)を三回繰り返す。

**継獅子・打締め**

獅子なぶりの笛合図を受けて、三体ともカシラを肩の上に乗せて二段継ぎとなり、獅子が舌を出して三回まわり、五穀豊穰・氏子安泰・商売繁盛の垂れ幕を掲げる。最後に、太鼓が急調子になり、地上に降りて暴れる獅子を取り押さえる形で打締めとなる。

**(2) 鉦太鼓踊り(午後七時三十五分〜八時二十分)**

二〇人前後の数の踊り手が大きな太鼓を抱えて輪状に立ち、踊り手の輪の外を取り巻くように配置される三、四の大きな鉦の音に合わせて太鼓を打ち、足を上げて飛び跳ねながら激しい動きで踊る。踊り手が交代しながら、三〇分を超える時間、踊り続ける。途中、踊り手のリーダーが口上を述べ、再度激しい動作の踊りを鉦の音に合わせて披露し、行事を終わる。詳細は、次のとおり。

**道行き・道引き** カシラを先頭に、掛け声と太鼓に合わせて踊り場(境内)に向かって進行する。

**庭入り** カシラを先頭に、踊り場(境内)に入る。その後、カシラを中心に太鼓の打ち手が円輪型の隊形となり、鉦のリズムに合わせて踊りながら太鼓を打つ。途中に次の「勧請」(口上)あり。

**勧請** カシラが神前に向かって「東西南北 勧請申さあーん」の口上を述べ、鉦太鼓踊りの開始を告げる

**踊り** カシラを中心に太鼓の打ち手が円輪型の隊形となり、鉦のリズム

に合わせて踊りながら太鼓を打つ。次の曲目(演目)を順に演じる。

(一) 庭入り  
(二) なぜ踊り 唄を伴う。近隣の木ノ庄の鉦太鼓おどり(具指定)の「なぜ踊り」と同様の歌詞である。

(三) せぐり

(四) 庭入り

(五) 三ツ拍子

(六) せぐり

(七) 庭入り

○十月二十日(日)

午後一時半 例大祭神事

午後二時 各組から巡行した神輿が参道口で合流、境内にて三体廻し

午後三時 御旅所神事

午後三時半 御霊移し(神輿から本殿へ)

午後四時 直会、御当引継ぎ

**口 設備・道具**

獅子は梶下地区に一体、梶上地区に一体、上小味・下小味地区に一体の合計三体あり、当該地区で鉦太鼓踊りとともに伝承されている。

**(1) 獅子舞**

・獅子三体

梶下組：雄獅子。獅子頭(赤面、黒シヤグマ)、黒地に牡丹・背中は

紅白の縞の胴幕。

梶上組：雌獅子。獅子頭(金面、金シヤグマ)、市松模様・黒地に牡

丹・背中は紺白の縞の胴幕。

上小味・下小味組：雄獅子。獅子頭(赤面、赤シヤグマ)、白・黒の

縞模様の胴幕。胴幕はいずれも約二間にも及ぶ長大なもので、

## ハ 役名・扮装・楽器等

### (1) 獅子舞

#### (一) 役名



【写真2】竹棒に下げた獅子舞の太鼓



【写真3】鉦太鼓踊り  
(鉦と太鼓を打ち鳴らして踊る芸態は、備南各地で見られる。)

### (2) 鉦太鼓踊り

- 昔は二、三〇人の大人・子供が入ったという。
- 太鼓：長胴の鋳留め太鼓。竹の棒に吊るし、二名で打つ。
- 横笛
- 台（神前に長机二脚を並べ、白布を掛ける）
- 鉦：直径約六〇cmの巨大なもの。竹の棒に吊るし、木槌状の撞木で二名で打つ。
- 太鼓：桶胴太鼓（長胴の杵付き締太鼓）。鼓面の直径約七〇cm、高さ約九〇cmの大型の太鼓。白い襷を左肩に掛けて吊るした太鼓を左腰前に抱え、右手で叩く。
- 梵天（撥）：約二〇cmの短いもので、先端に赤・黄色の華やかな房が取り付けられている。
- 鬼面・鬼棒・団扇

## ニ 歌詞・詞章等

獅子舞、鉦太鼓踊りともに、楽器の合間に合いの手（掛け声）等が入る。

鉦一、太鼓（紐締め桶胴太鼓）一五、チャンギリ一。なお、太鼓は全部で二一十台保有している。

### (三) 楽器

鉦・太鼓の演者の衣装は、獅子舞と同じく、上半身に法被を着用。地下足袋の演者が多い。鬼は赤い鬼面・茶シャグマ、袴姿で、採り物は右手に団扇、左手に鬼棒。

### (二) 扮装

踊り手（太鼓打ち）は約一五人（二人が「カシラ」として円の中央で踊る）。その他、交代要員が二〇名程度おり、途中で交代しながら演じる。鬼は一人（昔は「ひよつとこ」もいて、鬼と対をなして一緒に踊った）。鉦打ちは二名一組。複数組が交代で打つ。チャンギリ一名、歌い手一名（途中交替する）。

### (二) 役名

### (2) 鉦太鼓踊り

手打鉦。詳細は、前「ロ」を参照。

### (三) 楽器

太鼓一（鉦止めの長胴太鼓）、横笛一、チャンギリ一（シンバル状の手打鉦）。詳細は、前「ロ」を参照。

### (二) 扮装

獅子頭・胴幕。演じ手の衣装は、上半身に法被を着用。地下足袋の演者が多い。詳細は、前「ロ」を参照。

鉦一、太鼓一、チャンギリ一、横笛一、鬼面一、鬼棒一、団扇一、手打鉦一、獅子頭一、胴幕一、獅子舞の動きを誘導する「獅子なぶり」がいる。その他、太鼓打ち二名、笛一名。

(1) 獅子舞

獅子舞の太鼓拍子の一部を掲載する。

道行

『さあ〜さ』 カーコーカ カーコーカ カッ ドンドン

(三体の獅子が境内に入るまで繰り返し返す。最後の獅子が境内にはいつてから『切替え』を入れて切り替える)

切替え

いや・よーっ

ドン ドドドン ドドドン ドドドン

継ぎ獅子

(準備ができたなら獅子なぶりの笛合図をうけて)

いや・よーっ (獅子が立つ)

ドン ドドドン ドドドン ドドドン

ドン カコカ カコカ カコカ

ドン カコカ カコカ カコカ

いや・よーっ (ベロを出し、3回まわる)

ドン ドドドン ドドドン ドドドン

ドン カコカ カコカ カコカ

ドン カコカ カコカ カコカ

いや・よーっ (獅子が降り、あがく)

ドン ドドドン ドドドン ドドドン

ドン カコカ カコカ カコカ

ドン カコカ カコカ カコカ

~~~~~次第に早く打つ！~~~~~

いや・よーっ (獅子があがき、納める)

ドン ドドドン ドドドン ドドドン

ドン ドドドン ドドドン ドドドン



【写真4】獅子舞  
(令和6年は10名が獅子の中に入り、暴れ舞った。胴幕の中に多くの子供たちが入る。)

~~~~~どんどん早く打つ！~~~~~

(2) 鉦太鼓踊り

途中で「なぜ踊り唄(なで踊り唄)」が入る。詞章は、隣接する「木ノ庄の鉦太鼓踊り(県指定)」と同じであり、尾道市御調町の「みあがりおどり(県指定)」ともほぼ共通する。以下、歌詞を掲載する。

なぜおどりの唄

一、ヤレ しどろまんどろよ

やらにや(そ)ろわぬ ヨホへヤレなで杵の音

二、ヤレ なでた なで杵は

夜音よおとでのべて ヨホへヤレ音で参らせう

三、ヤレ 音じや〜と

太鼓の音で ヨホへヤレ宵が寝られまい

四、ヤレ 今の良い声は

細谷川の ヨホへヤレ鶯の声

五、ヤレ さまで鶯は

背は小まけれど ヨホへヤレ経の字を読む

六、ヤレ さまで経の字は

一字とかいて ヨホへヤレ二字と読む

七、ヤレ さまでこんな衆よ

度性根が抜けて ヨホへヤレ蟬のむでがら

八、ヤレ 蟬のむでがらは

蜘蛛の巣にかかろう ヨホへヤレ空で身も鳴く

九、ヤレ 空の七夕は

一年にや一度 ヨホへヤレ二年にや二度あお会う

十、ヤレ そより〜と

稲葉もそうほうほ ヨホへヤレ秋の風もたとう

十一、ヤレ 秋の今風にや

もみをたてられて ヨホハヤール餅や撞けまい

三、ヤレ 勢出よ〜と

勢出勢出いて ヨホハヤール汗の出る迄

モ一つ勢出勢出いて ヨホハヤール汗。せいへいげつさ

## ホ 芸能

### (1) 獅子舞

演舞の会場に三体の獅子が入り、それぞれの獅子頭を豪快に振りながら舞う。最後には屈強な大人三人が肩を組み、その上に大人一人が乗り、二段組み作り立ち上げる「**継獅子**」を行う。獅子の口から口上書き込まれた垂れ幕を垂らし、打ち締めは暴れる獅子を取り押さえる形で低い姿勢に戻る。

太鼓は二人が同時に叩いてリズムを取る。鼓面よりも胴を叩く回数が多い。太鼓の合間に合いの手(掛け声)が入り、「**打締め**」に向かって徐々に太鼓のリズムが急調子になる。

「**庭入り**」の際には、太鼓とともに笛・チャンギリが奏される。獅子は太鼓のリズムに合わせて口を開閉させ、左右に小刻みに動きながら時計回りに進む。「**御宮参り**」以降は、太鼓のみを打つ。

### (2) 鉦太鼓踊り

鉦でリズムを取り、太鼓打ちは掛け声を出し、踊りながら太鼓を打つ。太鼓打ちは円輪型の隊形になる。太鼓打ちのカシラ(当番組が務める)が円の中心に位置し、右手に持った撥を高く掲げたり、足を跳ね上げたりにして太鼓を打つ動作を繰り返す。その他の太鼓打ちは時計回りに移動しながらカシラに合わせて踊り、太鼓を打つ。鬼も円輪の中に入り、リズムに合わせて団扇や鬼棒を高く掲げたりする動作を行う。鉦のリズムに合わせて、太鼓の踊り手が合いの手(掛け声)を入れる。

庭入りの後、踊りの開始に当たってカシラが口上を述べる。踊りの途中、鉦・太鼓とともに、唄(なぜ踊り歌)という。)が入る。なぜ踊り

の所作は、次の動作を繰り返す。

(左足 前) ↓ (右足 前) ↓ (左足 後) ↓ (右足 前)にはねて後ろに下がる) ↓ (左足 後)

## 六 組織ほか

### イ 運営組織

芸能保存会のような組織はない。前夜祭で奉納される獅子舞、鉦太鼓踊りは、その年の例祭の当番地区が中心となって奉納する。なお、榎原八幡宮の祭礼全体は、神社・氏子総代・「御当」(頭屋)を中心に運営される。

### ロ 芸能出演者の資格、職、伝習得法

獅子舞、鉦太鼓踊りとも、出演者は男性に限られており、各地区ごとで年長者や習熟者が中心となり伝習している。

盆行事で演じる際に四回、秋祭りで奉納する際には五回、それぞれ事前練習を行う。令和六年度当番の梶下組では、秋祭での奉納に際して三回練習を行った。うち一回は出演する他の組も合同で練習を実施した。

### ハ 費用

芸能奉納には約一〇万円の費用がかかる。神社から当番地区に実費が助成される(上限一〇万円)。

## 七 由来等

### イ 獅子舞

一般的には獅子舞には「渡来脈」と「固有脈」があるといわれているが、当地域の獅子舞の由来は不明である。

この行事については各地区により特性がみられ、例えば梶山田の下組地区においては「獅子舞」の外、下組地区の内の三つの地域の各家の庭その他空き地などで、「鉦太鼓踊り」「手踊り」が行われている。この由来は昔、行事のための道具類を収納する施設が無かったため、地域の人々が一年間

自宅で預かる習わしがあった。一年間の保管を終えた後、地域の人々がお礼のため当家でこのような行事を行ったという。

梶下組の獅子頭は、現在の伝承者によると新調した記憶がなく、古くから使用されている。

なお、隣接する福山市芦田町柞磨の継獅子舞では、天保八年（一八三七）銘の獅子頭が残り、江戸時代後期には既に行われていたことが窺える。

#### ロ 鉦太鼓踊り

所伝では、足利尊氏が鎌倉幕府討伐に武勲のあった備後国杉原氏に梶山田村を含む所領を与え、このことに住民が喜び祝って鉦太鼓踊りが始められたと言われている。

当地の鉦太鼓踊りの起源は定かではないが、隣接する木ノ庄の鉦太鼓踊りでは、鉦に貞享二年（一六八五）及び同三年の銘が、太鼓に文化八年（一八一二）の銘があり、一帯に伝わる同種の踊りの歴史の古さを物語る。

### 八 付近の類似のもの

#### イ 獅子舞

獅子舞は県内各地に伝わり、正月や秋祭りの時期に各家を訪問して舞う獅子舞、祭礼行列に供奉して道中や境内・御旅所で舞う獅子舞が多く見られるが、一、二人立のものがほとんどであり、当地のように大人数で舞い、二段以上の「継獅子」を演じるものは、県内では尾道市北部、福山市北部、府中市南部などの数例にとどまる。以下に類似のものを挙げる。

○ 猪子迫大獅子舞（尾道市美ノ郷町猪子迫、尾道市指定）

獅子の胴幕に一〇人程度が入り、三段の継獅子を行う。平成十一年に演じられたのを最後に休止中。

○ 柞磨の継獅子舞（福山市芦田町柞磨 柞磨八幡神社、福山市指定）

獅子の胴幕に多数の氏子が入り、二段、時には三段の継獅子を行う。

○ 名字の獅子舞（府中市栗柄町名字・大門）

獅子の胴幕に八〜一〇人が入り、二段の継獅子を行う。

#### ロ 鉦太鼓踊り

尾道市内に、類似の鉦太鼓踊りが複数箇所では伝承されている。

○ 木ノ庄の鉦太鼓おどり（尾道市木ノ庄町、県指定）

○ 鉦太鼓踊り（尾道市美ノ郷町）

○ 久山田の鉦太鼓踊り（尾道市久山田町）

○ 栗原鉦太鼓踊り（尾道市栗原町）

なお、鉦と太鼓を打ち鳴らして踊る類似の芸態は備後南部各地で見られ、「みあがりおどり」（尾道市御調町）、「チンコンカン」（三原市）、「はねおどり」「胴鉦踊り」（福山市）、「太鼓踊り」「鉦太鼓踊り」（尾道市・三原市）などと呼ばれている。

### 九 記録類

#### イ 文書記録

・「梶山田獅子舞太鼓拍子」「鉦・太鼓踊り 拍子」平成二十六年九月作成

#### ロ 参考文献

・『原田探訪ガイドブック く尾道の秘境への誘い』原田町歴史・文化同好会、平成三十年

・「市史広報二〇二二年九月号」尾道市市史編さん委員会事務局、令和三年

（住貞 義量）

## 9 浦崎神楽うらしまかぐら

### 一 名称

浦崎神楽

### 二 文化財指定等の情報

尾道市民俗文化財（令和七年十月二十四日指定）

### 三 伝承地

尾道市浦崎町内

住吉神社

上組黄幡宮・大神宮・下組荒神社・戸崎厳島神社・満越厳島神社・海老高山神社・灘三寶荒神社・高尾王太子神社・新田護穀神社・荒神社

### 四 上演の機会及び場所

毎年、十月第一週土曜日から十一月第一週土曜日にかけて毎週、浦崎町内の各地区で神楽が奉納される。十月第二週土曜日夜には、住吉神社で八団体による住吉神社奉納神楽が行われている。

#### 【各地区での時期と場所】

十月第一週土曜日 戸崎神楽保存会 厳島神社

十月第三週土曜日 上組神楽同好会 上組集会所

灘区神楽保存会 灘俱樂部

海老区神楽保存会 海老公民館

十月第四週土曜日 下組区神楽部会 荒神社

高尾神楽保存会 高尾集会所

新田神楽舞子 新田俱樂部

十一月第一週土曜日 満越神楽保存会 厳島神社

### 五 行事次第、芸能の構成、演目、芸態その他

#### イ 行事次第、芸能の構成及び演目

現在、浦崎神楽は浦崎町神楽連絡協議会を構成する町内各地域の八団体によって、主に秋祭りで奉納されている。十月第一週土曜日に戸崎神楽保存会が厳島神社で、十月第二週土曜日に八団体全てが浦崎住吉神社秋季例大祭で、十月第三週土曜日に上組神楽同好会が黄幡宮奉納神楽として上組集会所で、同じく灘区神楽保存会が三宝荒神社奉納神楽として灘俱樂部で、同じく海老区神楽保存会が高山神社奉納神楽として海老公民館で、十月第四週土曜日に下組区神楽部会が荒神社で、同じく高尾神楽保存会が王太子神社奉納神楽として高尾集会所で、同じく新田神楽舞子が護穀神社・荒神社奉納神楽として新田俱樂部で、十一月第一週土曜日に満越神楽保存会が荒神社奉納神楽として厳島神社で神楽を奉納する。当初は浦崎住吉神社の奉納神楽は、明治より昭和五十四年まで下組区神楽部会が奉納していたが、昭和五十五年からは当番地区を決め、毎年各地区持ち回りで運営していた。平成十四年四月に「浦崎町神楽連絡協議会」が発足し以降その年の当番地区が、最初と最後の演目を担当し、八団体全てで運営、奉納している。

十月第二週土曜日の浦崎町住吉神社における奉納神楽は、住吉神社境内に仮設された舞台により、午後六時三十分から神楽が奉納される。

演目については、悪魔祓い、長隋師（眺瑞師、手水石）、巻物、姫梶、皇子王子、玉取公、牛若丸、万古大王、紅葉狩り、八重垣、剣舞、王子、五穀、盆舞等が各団体により行われている。悪魔祓いは、赤鬼・白鬼の舞手が笹と剣を振り、悪魔祓いの舞をする。眺瑞師は神前を清め、神々を迎える。巻物は岩戸開きの舞の後、二名が岩戸開きの故事を記した巻物を長々と読み、その巻物を持って舞う。皇子王子はヤマトタケルの熊襲征伐の物語。エンソウ、キネスケの楽しい演技が見もの。玉取公は竜宮海に奪い取られた貴重な玉を取り戻す舞である。牛若丸は、牛若丸と

弁慶のやり取りが面白く、斧を研ぐ舞など見所も多い（詳細は別表のとおり）。

## ロ 設備・道具

### (1) 舞台

神楽を奉納する場所はそれぞれだが、約三メートル四方の神楽舞台を設け、四方に竹で柱を立て、注連縄を張り、七五三に束藁を、その間に紙垂をたらし、御神灯をかかげる。舞台正面に四方の井桁状に組んだ青竹で神棚が祀られる。神棚には御神酒が供えられ、演目の中で使用される。

舞台の後ろ側には幕を張り、楽屋が設置され各神楽保存会の神楽幕、暖簾が飾られる。

### (2) 花火その他

神楽の演出のため、八岐大蛇の場面では蛇の口から神楽花火が使用される。

## ハ 役名・扮装・楽器等

舞い手は演目によって概ね一〜六人。採物を持ち、素面の舞を基本とする。

### (1) 面

赤鬼面、白鬼面、恵比寿面、姫面、翁面、

### (2) 採物

演目によって鈴、白幣、刀、扇子、笹、杖、熊手

### (3) 楽器

楽器は太鼓と横笛が使用される。演目によって楽の人数は異なるが、概ね太鼓二人、横笛一人の場合が多い。

## ニ 歌詞・詞章等

「満越神楽台詞」、「灘区神楽及び盆踊り唄台本」、「戸崎神楽台詞」が残されている。

## ホ 芸態

三村泰臣氏が分類された広島県内の神楽、五分類のうち、「芸子諸島の神楽」の系統であり、採物を持ち、太鼓と横笛の囃子に合わせて神楽を舞う。時に頭を切ったり（頭をひねる動作）、一舞しては必ずバツクしながら舞い返す、片足跳びで舞う等特有の動作が見られる。「悪魔祓い」「長随師」「巻物」等の神事舞がまず舞われ、「皇子王子」「玉取公」「牛若丸」「紅葉狩り」「八重垣」等の物語舞が行われる。特に「王子」が終盤に舞われ、五行の神楽である王子舞を現在でも残していることに重要な意味がある。

このような、「悪魔祓い」「巻物」「剣舞」等の江戸時代に由来をもつ神楽を核として、神話の能舞（王子、八重垣等）の演目を整えたものが「芸子諸島の神楽」であり、浦崎神楽はその代表例といえる。

## 六 組織ほか

浦崎町神楽連絡協議会が浦崎町全体の神楽組織であり、その構成団体として浦崎町各地区の保存会である上組神楽同好会、下組区神楽部会、戸崎神楽保存会、新田神楽舞子、満越神楽保存会、灘区神楽保存会、海老区神楽保存会、高尾神楽保存会がある。各地区の保存会は概ね一〇〜二〇名の団員で構成されている。神楽保存会の練習は、秋祭りが近づく八月頃から神社などでの奉納に向けて、週三回程度の頻度で行っている。

浦崎町各地区の小中学生などは、特に決まりはないが随時参加しており、神楽演目によっては、出演している。

神楽に係る費用については、地域からの寄付金、負担金等で賄われており、他地域の秋祭り等に出演した際には、依頼者の負担となる場合が多い。

## 七 由来等

浦崎神楽という名称は、旧浦崎村（現尾道市浦崎町）内の地域に伝承さ

れている神楽を示している。その浦崎神楽の起源は、地元では伝承のみ残されており、『浦崎村史』には「戸崎の神官山根摂津守が神楽に造詣が深く、明治初年上組部落の有志がその伝授を受け、弟子から弟子へと伝えて数代に及んでいる。他部落の有志にも伝授して次々に受け継がれたが、戦後若者の継承者がなくなり、神楽は二、三の部落のみとなった。この事態を憂う人達相図り、各部落に神楽保存会が出来、小学生四、五年生から中学一、二年生までを対象に古老によって伝授され、命脈を保持している。」と記載がある。

また、『沼隈町誌民俗編』では、「沼隈町内地域、明治中期に常石の神職村上朝生が地元の若者に神楽を指導し、常石東組神楽と上山南水落神楽が生まれた。その後、そうした神楽に関わっていた人々が近隣の若者を指導し、明治〜大正時代に浦崎上組神楽等、神楽団体が結成された」との記載がある。

江戸時代後期、菅茶山編集の『備後福山領風俗問状答』中の「備後沼隈郡浦崎村風俗問状答」には、十一月の項に「荒神神楽」の記載がある。

「十一月 此月神事沸事 今月荒神神楽と申て、歳々初穂を集め置、五六年目に氏子共相集り、社人相頼神事仕候」とあり、浦崎地域を含む福山藩内では、荒神舞、荒神神楽として、神楽を奉納する。座祓（悪魔払い）、神殿入り、神迎え、剣舞、手草、神集、札舞、八重垣、王子等が記録されている。浦崎地域には、各集落に荒神社があり、荒神舞も古くから行われていたことがうかがえるが、文書等の記録では確認できない。上組集会所に「天保十五年」の墨書銘がある太鼓が残されている。

上記のとおり、浦崎地域では、江戸時代には荒神神楽が行われていたことも考えられるが、その後、明治時代に神職により神楽が伝授されていたことがうかがえる。

## 八 付近の類似のもの

広島県内の神楽を研究されていた三村泰臣氏の『中国・四国地方の神楽探訪』によれば、県内の神楽は五つに分類区分され、尾道市域では、御調神楽が行われている御調町が備後神楽のエリア、それ以外の沿岸部、島しょ部は芸予諸島の神楽に分類されている。

浦崎神楽と同様に頭を切ったり、バックで舞い返す動作が含まれる神楽として山波神楽（尾道市民俗文化財）がある。他に近隣地域には百島町に伝わる百島神楽、高須町の太田神楽、福山市沼隈町の沼隈神楽、福山市柳津町の柳津神楽、福山市金江町の野島神楽等があり、演目や動作等で類似している。

## 九 記録類

- ・「満越神楽台詞」満越神楽保存会
- ・「灘区神楽及び盆踊り唄台本」灘区神楽保存会 昭和五十四年
- ・「戸崎神楽台詞」戸崎神楽保存会
- ・「新修尾道市史 第6巻」青木茂 尾道市役所 昭和五十二年
- ・「浦崎村史」小畑正雄 昭和五十九年
- ・「尾道志稿」亀山元助土綱 文政七年（一八二五）
- ・「中国・四国地方の神楽探訪」三村泰臣 南々社 平成二十五年
- ・「沼隈町誌 民俗編」沼隈町教育委員会 平成十四年
- ・「柳津村誌」村田露月 柳津郷土研究会 昭和三十三年
- ・「福山市金江町誌」金江町誌発行委員会 平成四年
- ・「福山志料」菅茶山 福山志料発行事務所 明治四十三年
- ・「広島県の神楽探訪」三村泰臣 南々社 平成十六年
- ・「広島県の神楽」真下三郎 第一法規 昭和五十六年
- ・「尾道市の神楽」『広島民俗』西井亨 広島民俗学会 平成二十四年

（西井 亨）

【神楽の次第・詳細】（令和六年十月十二日 浦崎町住吉神社）

| 演目   | 団体名      | ①人数②衣装③採物④楽器  | 内 容  |
|------|----------|---|--|
| 悪魔祓い | 戸崎神楽保存会  | ①2名②赤鬼面、白鬼面、手甲、袴、大腰、足袋③笹竹④太鼓2   | 神楽の舞始めに神社・氏子に対して全ての悪魔を祓い神々の降臨する場所を清める神事舞い。赤と白の鬼面をつけた舞手が笹を振り、交互に悪魔祓いの舞をする。  |
| 長隋師  | 戸崎神楽保存会  | ①1名②烏帽子、鉢巻、大腰、千早、袴、足袋③鈴、御幣④太鼓2  | 赤・白鬼が邪気を祓って清めた神楽殿へ神々を呼び降ろす舞。神職が舞台に参入する前に手に水を注いで清める神事。  |
| 巻物   | 戸崎神楽保存会  | ①2名②烏帽子、鉢巻、大腰、千早、袴、足袋③鈴、御幣、巻物④太鼓2   | 岩戸開きの舞の後、太玉の命と小屋根の命の二名が岩戸開きの故事を記した巻物を長々と読み上げ、その巻物を持って舞う。清めた舞台に神を迎える神事舞。  |
| 皇子王子 | 新田神楽舞子   | ①5名（命、大将、エンソウ、キネスケ、姫）②命・烏帽子、鉢巻、鎧、鎧下、手甲、脚絆、足袋 大将・エンソウ・キネスケ・面、着物、手甲、脚絆、足袋 姫・着物、冠、姫面③命・鈴、御幣、キネスケ・エンソウ・斧 大将・杖、笹竹 姫・扇子④太鼓2、横笛1   | 十二代景行天皇の三男「皇子小白の命」が熊襲征伐の物語。命は熊襲を征伐するため、大将や家来二人が開いている宴席に姫となって入り込む。大将が酔い潰れた時、命は姿を解いて襲い、彼らを斬る。エンソウ、キネスケと大将の滑稽な掛け合いが見もの。目出度く討取り、名を改め「日本武の尊」となる。                    |
| 玉取公  | 満越神楽保存会  | ①3名（三漕命、海姫、綿海神）②三漕命・烏帽子、鎧、鎧下、手甲、脚絆、足袋③三漕命・鈴、御幣④太鼓2、横笛1  | 竜宮海に奪い取られた貴重な玉を取り返す舞。三漕命と海姫は小学生が舞手となっている。  |
| 牛若丸  | 灘区神楽保存会  | ①4名（牛若丸、小天狗、大天狗、弁慶）②牛若丸・烏帽子、兜、しゃぐま、陣羽織、鎧、着物、袴、大口袴、手甲、襷、腰帯、足袋／小天狗・兜、大しゃぐま、烏天狗面、着物、手甲、袴、大口袴、腰帯、足袋／大天狗・兜、大しゃぐま、天狗面、着物、手甲、袴、角帯、足袋／弁慶・烏帽子、手甲、黒装束、脚絆、足袋<br>③牛若丸・扇子、御幣、刀／小天狗・扇子、鉞／大天狗・薙刀／弁慶・薙刀<br>④太鼓2 | 狗、大天狗の元を訪れ、兵法を教わる。京の五条大橋で弁慶が千人切りをしていることを聞き、弁慶と対決する。牛若丸が弁慶を懲らしめ、共に平家を討つ仲間になり終わる。対決前の弁慶が薙刀を研ぐ場面では観客との掛け合いがあり、牛若丸と対決する場面ではアドリブで観客を巻き込んで牛若丸を困らせたりするなど、笑いを含んだ演目である。 |
| 盆舞   | 海老区神楽保存会 | ①1名（舞手）②着物、袴、襷、足袋<br>③お盆④太鼓2  | 数多くある奉納神楽の中で、観衆が楽しむ演目であり、二つの盆のあやつりを色々と変えながら、盆を落とさないように舞う。別名を「四季舞」と言う。セリフのなかに四季折々に咲く花の名前が読み込まれている。  |

| 演目  | 団体名     | ①人数②衣装③採物④楽器  | 内 容   |
|-----|---------|---|---|
| 八重垣 | 下組区神楽部会 | ①6名(素戔鳴命、足名稚、手名稚、稲田姫、大蛇赤、大蛇白)②素戔鳴…兜、羽織、脚絆 足名・手名…翁面、羽織、足袋 姫…巫女衣装、足袋 蛇…蛇腹③素戔鳴…鈴、御幣、刀 足名・手名…杖 姫…扇子④太鼓2、横笛1   | 足名稚、手名稚の老夫婦が川から水を取り、田地を開いて栄え長者と呼ばれたが、川上に八岐大蛇が住、七年間に七人の娘をとられ、末の稲田姫も取られるのかと悲しみ、天より降りた素戔鳴命を頼る。命は二人の願いを聞き、八間の垣を結び、七尺の柵に姫を登らせ、また、八塩折りの酒を造り、それを酒樽にいれ、姫とともに大蛇を待つ。案の定、八岐大蛇が現れ、酒を飲んで酔いつぶれたので、命はこれを襲い、激しい戦いの末、大蛇を退治する。大蛇と命が戦う場面が見もの。  |
| 剣舞  | 上組神楽同好会 | ①4名(東方…雨拝切之劍、南方…草薙之劍、西方…甲槌之劍、北方…十誉之劍)②鉢巻、襷、白装束、袴、足袋③御幣、鈴、刀④太鼓2、横笛1、チャンギリ1   | 古代の四方神、東方、西方、南方、北方が相携えて舞い、中央神を迎える意味の舞。緩急つけた囃子に合わせ、四人の舞手がそれぞれ刀を持ち、それをひらめかし、白紙で巻いた刀を取り合い、アクロバティックに離れたり合ったり、跳び跳ね、廻る。   |
| 王子  | 高尾神楽保存会 | ①4名(太郎、二郎、三郎、四郎)②烏帽子、鉢巻、襷、鎧、下垂、袴、手甲、脚絆③御幣、鈴④太鼓2   | 王子は陰陽五行説に基づく神楽で、五竜王の話が基本となる。陰陽を表す盤古大王とその妃の間に五行にあたる五人の竜王(王子)が誕生する。盤古大王は死期が近いことを悟って遺産を分配する。太郎(青帝青龍王 木神)、二郎(赤帝赤龍王 火神)、三郎(白帝白竜王 金神)、四郎(黒帝黒竜王 水神)にそれぞれ東西南北と四季、九十日ずつが分配される。さらに五郎(黄帝黄竜王)が誕生するが、与えるものがなく、土神と宝剣が与えられる。五郎は兄たちを訪ねるが、弟はいないと答え、四は万物の基礎であるとする。再度兄を訪れた五郎は、五こそ万物の基礎であるとするが、断られる。こうして、四対一の戦いが始まるが、その時博士が現れ、条件を示して和解を勧める。陰陽五行説に説く自然界の法則を分かりやすく劇化して、季節の推移や寒暖の変化等、農民に知らしめた神楽である。王子はこのうちの四人の王子の武術鍛錬の場面をとりあげたものである。 |
| 五穀  | 戸崎神楽保存会 | ①5名(保食の命、爺、婆、鬼、福の神)②保食の命・烏帽子、大腰、千早、袴、足袋／爺・烏帽子、大腰、千早、袴、足袋、翁面／婆・着物、姥面／鬼・手甲、袴、直垂、足袋／福の神・烏帽子、大腰、千早、袴、足袋、面、打ち出の小槌、大袋③保食の命・御幣、鈴、盆／爺・杖／婆・杖／鬼・笹／福の神・打ち出の小槌、大袋④太鼓2 | 播州高砂の爺と婆に五穀の種(米・麦・粟・稗・豆)を授け、爺婆がそれを一万倍に増やすという話。残りの五穀を煎って鬼を払い福を招く。即興のアドリブもあり、笑いがおこる演目の最後。餅(お菓子)をまく。   |



悪魔祓い



巻物



皇子王子



珠取公 (玉取公)



牛若丸



八重垣



八重垣

## 10 いわしじまいつくしまじんじゃかんげんさい 岩子島厳島神社管絃祭

### 一 名称

岩子島厳島神社管絃祭

### 二 文化財指定等の状況

尾道市民俗文化財（昭和五十九年六月一日旧向島町指定。平成十七年三月二十八日に向島町が尾道市に編入され、尾道市指定となった。）

### 三 伝承地

尾道市向島町岩子島一九四四 岩子島厳島神社

### 四 上演の機会及び場所

#### イ 行われる機会

岩子島厳島神社管絃祭

#### ロ 期日等

毎年七月下旬 令和六年は七月二十八日（日）（かつては旧暦六月十七日）

#### ハ 行われる場所

尾道市向島町岩子島厳島神社、岩子島海水浴場跡地、塩釜神社沖、大鯨島  
令和六年は大鯨島の前を通り、塩釜神社沖まで海上を巡幸（かつては大鯨島に上陸していた。）

※ 令和二〜五年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、神事のみを行い、管絃船の巡幸や天びんを振る行事は中止となった。

### 五 行事事次第、芸能の構成、演目、芸能その他

#### イ 行事事全体の次第、芸能の構成及び演目

令和六年次第（従来よりも一時間繰り上げて行われた。）

#### ①午後五時

社殿にて渡御祭（管絃祭祈願 御分霊を御幣に遷す。）

#### ②午後五時十五分

宮司が祓串にて浜や船（六隻）を清め、お神酒を捧げて塩でお祓いをする。

#### ③午後五時三十分

宮司が御座船に乗り込み、御幣を天びんの下に据え付け、祝詞奏上。

宮司が下船した後、演奏者が御座船に乗船。

#### ④午後五時四十五分

柴燈木船（篝火を焚く船）、提灯で飾ったお供船二隻、御座船が塩釜神社

沖に向けて出航。「天びん太鼓」

塩釜神社前海域で、左周りに三回半廻る。「ドンチャン」

（以前は、その間、大鯨島に数名が上陸して、鯨島神社の石祠の前で神事を行っていた。大漁を祈願し、拝礼の後、祠にお神酒をかけて笛「ドンチャン」の奉納をした。随船は大鯨島で待った。）（注1）

#### ⑤午後六時四十分

大鯨島付近で提灯を調べて厳島神社に向けて出発。

#### ⑥午後六時五十分

本社前の海で柴燈木船を先頭に、二隻の随船、御座船が一行に並んで左廻りに大きく三回半廻る。「ドンチャン」三周―「切り替」―「チャンギリ」半周。大鳥居前に船を着ける。

#### ⑦午後七時十五分

宮司が乗船して還御祭を行う。篠笛が「笙の笛」を奏した後、祝詞奏上。宮司が御幣を持って下船して、御幣を本社に戻す。演奏者が下船して「天びん太鼓」を奏しながら社殿前に進む。

#### ⑧午後七時二十分

本社前に小ぶりの「天びん」が出され、子どもたちが「せーの よいやさ

―』という掛け声とともに四方にロープを引いて順に倒す（本社に向かって前後右左を二回繰り返す）。

子どもたちが社殿を右回りに一周する。

本社前で、子どもたちが「せーの よいやさー」という掛け声とともに四方にロープを引いて天びんを順に倒す（本社に向かって前後右左を二回繰り返す）。

子どもたちが社殿を左回りに一周する。

本社前で、子どもたちが「せーの よいやさー」という掛け声とともに四方にロープを引いて天びんを順に倒す（本社に向かって前後右左を二回繰り返す）。（注②）

「天びん太鼓」

### ⑨午後七時三十五分

演奏者が再び乗船して海岸前を左回りに三回半廻る。「どんちゃん」

### ⑩午後七時五十分

御座船を大鳥居前に着けて、管絃祭終了。

## ロ 設備・道具

○御座船一隻 柴灯木船（注③）一隻 御供船二隻

※ 昔は手漕ぎだったが、現在はエンジン船を使用している。船は提灯で飾り付け、御座船には鳳凰を戴いた天びんを載せる。令和六年度に提灯を新調した。灯りは、篝火を焚き、提灯はローソクで灯っていたが、現在は電灯に変わっている。

○天びん一基

※『尾道志稿』（注④）には

又男子ある家には、天秤と唱て額行燈のごとき物を作り、其頭に人物或は鳥獸の類の髹を添へ、夜は燈を明し其戸口に建つ。昼夜に三四度も数十本建連して東西へ持ありく、或は五人持或は三人持と唱ふ、其大小軽重により持人も多少あり。此天秤の前後は厳しく太鼓をたゞき、

其勢ひ猛烈也、実に当境第一の壯観也。天秤は銀を量る天秤に似るをもて名付しならん、又踊をすべて翔り踊と云、あちらへも翔々こちらへも翔ると云より、天秤の名目も出るともいふ。

の記述がある。かつては岩子島の「毘沙郷」「下条」「郷条」の三地区が、「雉」「孔雀」「鳳凰」の飾りがついた三つの天びんを三年に一度持ち回りで出した（注⑤）。社殿に三年分をまとめて描いた巡幸の絵（明治十七年）がかけられている。

## ハ 役名・扮装・楽器等

### (1) 役名

- ・ 奏者（笛、太鼓、鉦）は御座船に乗船する。天びん倒しの時は上陸して演奏する。
- ・ 提灯を持つて宮司に付き従う祭人四名。

### (2) 役の扮装

奏者は、揃いの法被を着て、はちまきをする。

### (3) 楽器

笛七名、鉦一名、太鼓一名

## ニ 歌詞、詞章等

歌詞はない。楽の譜については別記のとおり。

## ホ 芸能

別記写真のとおり。





御座船



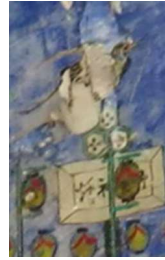
明治17年に描かれた絵



子ども用の天びん



鳳凰の天びん



雉



鳳凰



孔雀



⑦奏者が下船して本社前に進む



⑥本社前に帰って、三匝する



①社殿にて渡御祭



⑧本社前で天びんを倒す



⑦官司が乗船して還御祭を行う



②官司によるお祓い



③官司が乗船して御幣を据え付ける



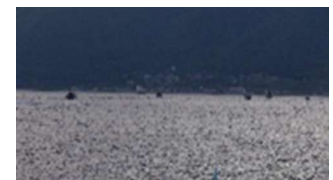
⑨本社前の海にて三匝する



⑦御幣を本社に返す



③奏者が乗船する



④塩釜神社沖に向けて出発

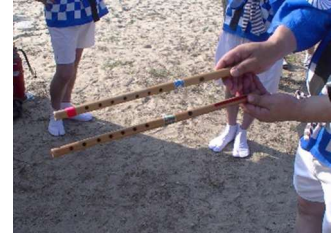
丸数字は、五イの行事次第の番号に対応



陸に上がった手打ち鉦



陸に上がった太鼓



手作りの笛



塩釜神社沖で「ドンチャン」奏しながら三匠する

岩子島巖島神社管絃祭 天びん太鼓

Musical score for '天びん太鼓' (Amanabira Taiko). It features three staves: Flute (篠笛), Gong (鉦), and Drum (太鼓). The key signature is three flats (B-flat major/D minor) and the time signature is 2/4.

岩子島巖島神社管絃祭 チャンギリ

Musical score for 'チャンギリ' (Changiri). It features three staves: Flute (篠笛), Gong (鉦), and Drum (太鼓). The key signature is three flats (B-flat major/D minor) and the time signature is 4/4.

岩子島巖島神社管絃祭 ドンチャン

Musical score for 'ドンチャン' (Donchan). It features three staves: Flute (篠笛), Gong (鉦), and Drum (太鼓). The key signature is three flats (B-flat major/D minor) and the time signature is 2/4. The score includes measure numbers 6, 11, and 16.

Musical score for 'チャンギリ' (Changiri) - continuation. It features three staves: Flute (篠笛), Gong (鉦), and Drum (太鼓). The key signature is three flats (B-flat major/D minor) and the time signature is 4/4. The score includes measure numbers 5, 9, 13, and 17.

岩子島巖島神社管絃祭 笙の笛

Musical score for '笙の笛' (Sheng no Fue). It features three staves: Flute (篠笛), Gong (鉦), and Drum (太鼓). The key signature is three flats (B-flat major/D minor) and the time signature is 2/4.

岩子島巖島神社管絃祭 切り替

Musical score for '切り替' (Kirikae). It features three staves: Flute (篠笛), Gong (鉦), and Drum (太鼓). The key signature is three flats (B-flat major/D minor) and the time signature is 4/4.

×は縁打ち

## 六 組織ほか

### イ 行事全体の運営組織

島内三地区が三年ごとに担当していた。平成九年よりは岩子島全地区をあけて賑やかに行われている。（『向島町史』）（注6）

現在の地区の住戸数は約二〇〇戸。岩子島厳島神社の総代は六名。岩子島厳島神社の宮司は宮島の厳島神社の神職が兼務している。

管絃祭の行事は、岩子島民俗文化保存会が中心となり、地域住民のボランティア約五〇人の協力を得て運営している。

### ロ 芸能出演者の資格、職、伝習得法

五月の節句から毎夜組の集会所で笛・太鼓・鉦の練習をする。特に笛については特別の竹を尾道市の竹柚場に注文し、その制作は代々の若連中によって受け継がれ、独特の音色が伝承されてきた。（注7）

一度途絶えて復活させた時、中断する前の音楽テープが残っており、昔を知る人が子ども会に教えた。当時小学生だった方々が現在奏者をつとめている。現在は、特別の竹を尾道市の竹柚場に注文しているわけではない。

### ハ 費用（当該芸能の伝承、公開経費の分担法）

管絃船を出す場合、数十万円の費用がかかる。この費用は、尾道市からの補助金や、戸別二、三千円の住民負担金や寄付金などにより賄う。

### ニ 保存会等

岩子島民俗伝統文化保存会（川口雅司会長、約一五名）

## 七 由来等

神社の創立年月日は不詳。市杵島比売命が筑前国宗像より御発船御巡幸の際、安芸国佐伯郡厳島に御着船の後、同国豊田郡生口島より当島浦浜に御着船され、しばらく滞在された所以で、後世に御社を建築して祀っている、故に厳島に次いで古社だという記述が神社明細帳に記載されている。また、大昔、市杵島比売命が多く随員を連れてこの浦に来られたが、狭くて九九隻までの船

しか着岸できなかったために卑島（いやしじま）、または否支持島（船を皆着

け得ない島、いやしぢしま）という言い伝えもある。明治二十一年までは「鰯島」と書かれていた。社殿改築、鳥居替等の際は安芸の宮島から鹿が渡つてきて、一日から七日間、例外的に四〇日間も滞在した後に泳ぎ去つたためこは

鹿渡之浦（かどのうら）という地名であるという言い伝えもある。再興寛文十一年二月十三日、元禄九年九月廿八日、元文二年五月一日、宝暦十年九月、安永二年四月、享和元年九月、文化十一年十二月十二日、文政七年八月十九日、天保十四年八月十七日、右九度の棟札が存在する（注8）。

管絃祭が始まった時期は不明であるが、文久二年（一八六二）六月十七日の「夜尾道向島之鰯浜ウニ云処ニ厳島明神之社有由ニ而、管弦など有之様子ニ見へ火光満、海浜花火多く揚ル也」という記録から、江戸時代末期には賑やかに行われていたことが分かる（注9）。昭和十三年刊行の郷土誌には「十七日 宮島祭、殊に岩子島、厳島神社大祭にて、江奥干汐、岩子島等より集る、お供船は誠に賑ひ、近郷よりの参詣船は海につらなる。」と記述されている。（注10）。昭和四十二年に発生した対岸の尾道吉和地区の漁師とのトラブルで途絶えていたが、昭和五十五年から数年間復活した。復活させた時、音楽テープが残っており、昔を知る人が子ども会に教えた。当時小学生だった方々が現在奏者をつとめている。その後文化・スポーツ財団の助成、向島町、尾道市の補助もあり、平成九年に復活して現在に至っている（注11）。

## 八 付近の類似のもの有無

- ・ 大浜厳島神社管絃祭（因島大浜町）
- ・ 重井厳島神社の明神祭（因島重井町）
- ・ 管絃祭 十七夜祭（因島中庄町）
- ・ 管絃祭（ホーランエンヤ）（瀬戸田町高根）
- ・ 宮原厳島神社の管絃祭（瀬戸田町宮原）
- ・ 干汐厳島神社管絃船巡幸（向島町干汐）

・住吉祭の曳船(向島町五島神社 ※平成三十年頃から廃絶)  
 以上、悉皆調査から尾道市内で報告があったものを抜粋  
 なお、県内では、宮島の厳島神社管絃祭のほか、沿岸部では広島市、呉市、竹原市及び大崎上島町において、山間部では北広島町、安芸高田市及び三次市において、県外でも愛媛、山口及び島根県において、「管絃祭」「十七夜祭」「おかげんさん」などの名のつく類似の祭りが行われている。(注12)

## 九 記録類

### 参考文献

- ・『向島町史 通史編』向島町史編さん委員会編、向島町、平成十二年
- ・『向島の民俗 改訂版』民俗資料第八集、向島町文化財保護委員会編、向島町教育委員会、昭和六十三年
- ・『向島の文化財 第三版』向島町民俗資料集第十集、向島町文化財保護委員会編、向島町教育委員会、平成四年
- ・『尾道志稿』亀山士綱、文化十三年(一八一六)(『備後叢書 第五卷』得能正道編、東洋書院、平成二年)
- ・『備後向島岩子島史』菅原守編、昭和十三年(聚海書林、昭和五十六年)
- ・『村上家乗 文久二年・三年』広島県立文書館資料集七、広島県立文書館、平成二十四年
- ・『岩子島厳島神社管絃祭参詣記』『尾道学研究会 official magazine』大知徳子、尾道学研究会、平成二十五年
- ・『山陽日日新聞』昭和四十二年七月二十七日、昭和五十五年七月十六日、昭和五十七年八月六日、平成九年八月二日

## 注

- (1) 祭神は鯨島大神。大正三年五月に岩子島の竹本治作、岡本石太郎ほか四名が相諮り、大漁を祈願して社殿を創建した。  
 大知徳子「岩子島厳島神社管絃祭参詣記」『尾道学研究会 official magazine』(平成十五年、三二～三六頁)
- (2) 広島県神社誌編纂委員会『広島県神社誌』(広島県神社庁、平成六年、五八〇頁)  
 かつては、船上での神事後、天びんが陸に上がり、奏者もこれに続き、大人が天びん太鼓のリズムに煽られて、四方の縄で天びんの引っ張り合いとなり、荒れながら社殿を三周して船に帰った。前岩子島民俗伝統文化保存会会長の三阪博幸氏によると、御座船に載せる天びんは重く、船から持って降りて組み立てるのが大変なので、また子供たちが倒せるようにするために小ぶりの天びんを用意したという。コロナ禍で休止する前は、大島居前と本社前で天びんを前後左右に二回ずつ倒した後に、子どもたち、天びん、奏者が社殿を右回りに一周して、本社前と大島居前で同じように天びんを前後左右に二回ずつ倒した。
- (3) 向島町文化財保護委員会編『向島の文化財 第三版』(三三頁)には、「祭提船」と書かれている。
- (4) 亀山士綱『尾道志稿』文化十三年(一八一六)(得能正道編『備後叢書 第五卷』東洋書院、平成二年、三六五頁)
- (5) 前岩子島民俗伝統文化保存会会長 三阪博幸氏の話より。
- (6) 向島町史編さん委員会編『向島町史 通史編』(向島町、平成十二年、九六九～九七〇頁)
- (7) 向島町文化財保護委員会編『向島の文化財 第三版』(向島町教育委員会、平成四年、一二二頁)
- (8) 菅原守編『備後向島岩子島史』昭和十三年(聚海書林、昭和五十六年、二一九～二二二頁)
- (9) 『村上家乗 文久二年・三年』(広島県立文書館資料集七、広島県立文書館、平成二十四年、五〇頁)
- (10) 前掲8、五六〇頁
- (11) 前岩子島民俗伝統文化保存会会長 三阪博幸氏の話より。  
 『山陽日日新聞』昭和四十二年七月二十七日、昭和五十五年七月十六日、昭和五十七年八月六日、平成九年八月二日
- (12) 大久保聖子「広島県における管絃祭の研究Ⅰ」(宮島厳島神社と瀬戸内海沿岸地域の管絃祭)『広島民俗』第九十二号、令和元年)、大久保聖子「広島県における管絃祭の研究Ⅱ」(山間部の管絃祭と全体の比較考察)『広島民俗』第九十三号、令和二年)

(大久保 聖子)